2025年5月22日

意見陳述書

堀之内来夏

こんにちは。原告の堀之内来夏と申します。私は東京で生まれ、育ちましたが、小学4年生のときに両親とともにアメリカ・カリフォルニア州に渡り、2022年に大学進学と同時に日本に帰国しました。現在は京都に在住し、立命館大学国際関係学部の4回生です。

私は、夏が来るのが怖いです。

日本に戻って以来、日本の夏は毎年のように最高気温を更新しています。とりわけ京都の暑さはすさまじく、私が大学に入学した頃よりさらに厳しくなっています。外を少し歩いただけでも倒れそうになります。このような異常な暑さに慣れようとしている事態が異常だと感じます。

生活費を抑えるため、大学1回生・2回生のときはできるだけエアコンや暖房を使わないようにしていました。しかし、2023年の2回生の夏以降はエアコン無しでは過ごせなくなりました。そうしなければ頭痛がして熱中症になると感じますし、集中して論文を書くこともできません。この先、どうなっていくのでしょうか。

さらに最近は気温の変化が激しく、毎朝どんな服装をすればいいのか分からず、日常的にストレスを感じています。半袖を着た翌日にセーターが必要になるような、そんな不安定な気候です。気圧の変化と気温の変化により、今年1月に偏頭痛と診断されました。薬を手放すことができません。

2年前の夏、愛犬を連れて東京や京都の平等院を訪れた時のことです。家を出た途端、車を降りた瞬間から息を切らしながら歩く犬たちの姿を見て、「熱いアスファルトで肉球が火傷しないだろうか、熱中症にならないだろうか」と心配でたまりませんでした。それ以来、夏の散歩は早朝や日没後に限定するほかなくなりました。

夏は「暑さで安全ではない季節」、冬は「気温が不安定な季節」になり、当たり前のように毎年やってきます。それだけでなく、ますますひどくなっていくことに、強い危機感と恐怖を抱いています。

また、カリフォルニア州に住んでいたとき、干ばつの影響で山火事が頻発しました。近くの高校が被害を受け、生徒たちが私たちの学校に避難してきました。私が住んでいた地域に山火事の煙が押し寄せ、空気は臭く、重くなり、健康を害するレベルでした。こうした大気汚染のせいで、私の高校でも、マーチングバンドの練習や授業が中止になる日もありました。焼けた後の山に入ったことがあります。真っ黒に焦げた木がたくさん倒れていました。ゾッとする光景でした。2020年に森林火災が発生した時のことです。この火災の近くにあった高速道路を通りかかったとき、目の前が一瞬のうちに煙に包まれ、右側にはオレンジ色の光が木々を燃やしていました。まるで、地獄絵の中にいるようでした。今年も、ロサンゼルスで山火事が発生しました。日本でも岩手県の大船渡で森林火災が発生したくさんの人が避難しました。それだけでなく、岡山でも、今治でも燃え、宮崎にも広がりました。

この現実を前に、「地球が沸騰時代に突入した」と言われるのも、誇張ではないと実感しています。

また、先月、フィリピンで巨大台風の被害を受けた女性の話を聞きました。彼女はそのときのことを思い出しながら涙をぬぐい、家族が代々大切に育ててきた庭や家、生活に欠かせない船までも失ってしまったこと、そしてお母さんが何も見えない泥水の中を歩き続けた結果、足を深く切ってけがを負ったことを語ってくれました。

彼女の島の人々は温室効果ガスをほとんど排出していないにもかかわらず、彼女が被害を受けたことに対して、私は「私が加害者であり、同時に被害者でもある」と強く感じました。もしもっと早くこの訴訟を起こしていれば、そして日本が環境や未来、若者の事をもっと真剣に考え、石炭火力に依存しない政策を早期に策定していればと、悔しさがこみ上げました。

気候変動は国境、人種、動植物、自然環境、世代を超えて命や生活に影響を及ぼします。今生きている人は、未来の世代が心地よく生きられる環境を残す責任があります。

小学生の頃に子ども新聞で読んだサンゴの白化現象も、気候変動による気温の上昇が原因で起きるものです。あれから12年以上経った今でも、この気候変動を止めるために削

減が足りていないことに言葉を失います。今こそ、排出量を削減し責任を取ってください。

このまま排出を止めなければ、手遅れです。取り返しがつかなくなるまで、時間はありません。今しかないのです。

今のままでは、日本の若者、そして世界中の若者が、ますます激甚化する異常気象の中で未来を生きていかなければなりません。それは、あまりにも不公平です。これから生きていく人々、若者の未来を守るために、私たちは今、行動しないとイケないのです。

気候変動は「自然災害」ではなく、「人災」です。私は、日本がこの現実を直視し、火力発電事業者がまず、温室効果ガスの排出を国際水準まで削減することを、心から求めます。